
真理と俺。

KOF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真理と俺。

【Nコード】

N0981Z

【作者名】

KOF

【あらすじ】

自称普通の高校二年生、本多識織。彼が現在在住している東京都、と日本各地では自殺が多発していた。そんな中、識織少年は、向こう隣りのアパートに住む美人ねーちゃんの自殺を目撃してしまいい。超能力や魔術といったものが、ひそかに跋扈する世界に、一人の少年が巻き込まれる小説。 ナイフ戦闘に憧れての、異能バトル系モダンファンタジーです。

プロローグ

「ねえ、神様って、いるの？」

少しだけ昔、一人の少女が父親に問うた。

それは、どれだけの人間が疑問に思ったことか。その少女もまた、その多くの人間の一人だった。

しかし、父親は、何も躊躇わずに答えたのだった。

「いるさ。お父さんは、信じているから」

信じるところに、神はあらわれるんだよ。

少女の頭を撫でながら、父親は微笑んだ。

少女は、蒼白なその顔を、父親に向けて、彼と同じように微笑みながら、また、問うた。

「じゃあ、わたしのところにも、信じれば、神様はやってくるかなあ？」

やってきて、お願い事、叶えて欲しいなあ、と。笑いながら、顔を伏せた。

それは、不遜すぎる願いなのかもしれない。叶えて欲しいと思うことさえ、不遜なのかもしれない。それ以前に、叶う可能性など、零なのかもしれない。

それでも、願わずには、いれなかった。

「お父さん。神様は、わたしのこと、嫌いなのかな」

「……………」

白いベッドの上で、静かに涙を零しながら、無力な父に、そう語った。白い髪も、その涙で濡らしながら、触れれば折れてしまいそうな喉をしゃくりあげながら。

「お父さん、お父さん。わたしは、どうして、」

「神様がお前を嫌いになっても」

私は、お前のことを嫌いになつたりしない。

私が、神になってやる。

父も、同じく涙を黒い瞳から零しながら、彼女の手を握った。

この二人には眩し過ぎるほどの日の光が差し込む白い部屋で、二人はお互い泣きあった。どちらが、どちらにというわけでもなく、どちらもが、どちらにも、泣いた。

「天の坐」

その、眩し過ぎるほどの部屋に、黒い点がぼつり。

そこからなのかもしれない。

無力な男が、狂い始めたのは。

プロローグ（後書き）

この作品は、作者の偏見によって満ち満ちています。

感想、批判、指摘、お待ちしております。

第一話：自殺予兆

二十一世紀もようやく世紀末を迎え、二十二世紀への期待が膨らむ中。様々な技術が発展し、様々なことが可能になった時代。

それでも、人が住む場所が一新されるわけでもなく、二十世紀から存在するアパートメント住宅。多機能化が図られたとはいっても、所詮はアパート。高級マンションなどと比べるとセキュリティ面でも圧倒的に負け、外面でも完璧に負けた存在だが、安価な家賃は学生が住むにはちょうどいいのだった。

その、都内某所のアパートの一室。

「自殺者が全国で急増、ねえ」

黒髪黒目の平凡な容姿をした少年、ほんだしきあり本多識織。登校直前なのか、リビング兼寝室で食パンをかじりながら、テレビ画面に映る、今話題のニュースを眺めていた。

「俺なら出来ないがね。そんな恐ろしいこと」

そう言う。バターナイフでバターを掬い取りパンに塗りつけ一口。塗り過ぎたのが、濃厚なバターの味が口いっぱいに広がる。隅に置いてあったオレンジジュースで口直しをすると、もう一度テレビに視線を移した。

そこには、自殺者の遺書が映し出されていた。それも、生々しい錆色の染みがある、それらしい封筒に入った。

その文面は短く、端的な言葉しか述べられておらず、一般人が見ればサイコパスな文書にしか見えない。むしろ、書いた本人以外は何を言わんとしていたのか分からない。

ただ一文、こう書かれているだけなのだから。

『奴が来る』

震えた文字。飛び散った錆色の血液の痕。死亡方法は恐らく、^{リストカット}手首切断。文書に飛び散った染みの模様は乱雑で、『刃物』ではないことは明らかだった。文書を書いた直後に筆記用具で掻き切ったのだろうか？

「……………自殺か。味気ない、死に方だな」

そう言うときさつさと残りの食パンを口に放り込み、オレンジジュースで流し込むと、横に置いてあったカバンを持って玄関へと駆けて行った。

「いってきます」

と、誰に言うでもなく、アパートの中へと語りかけた。もちろん、誰からの返事もあるわけも無く、ただただ声が空しく響いただけだった。

靴を履き、玄関を開けると、そこには黒髪ポニーテールの可愛い幼馴染の姿があるわけもなく、新学年早々の冷たい外気が体を引き締めた。

眼下には広大な光景が 広がっているわけも無く、アパートの三階、見渡せるのは、向かいの棟の美人ねーちゃんの下着ぐらいである。

いつも通りの光景。いつも通り際どい下着が風に揺れている中、一つだけ、異常な空間があった。

向かいの美人ねーちゃんが、ブランダの取っ手の部分に足をかけていた。ただ、尋常ではない様子で、何かに追われているような。

そして、目が合った。口が開く。か細い声で聞こえなかったが、口の動きで何を言わんとしているのかだけは分かった。

『た、たすけっ！？』

分かったが、言い終わる前に彼女は何もない虚空へと体を投げた。

識織が知るところの彼女は、夜に出勤するどこにでもありふれたただの風俗嬢だったはずだ。もちろん、基礎体力も『一般』の域を出ない彼女は、絶対に助走なしで、否、もしあったとしても、識織が住む第一棟と彼女が住む第二棟の間は飛べない。

そして、超能力者でも魔術師でもない彼女を待ち受けるのは、

重力と言う名の、当たり前前の力である。

次の瞬間、彼女は一瞬の浮遊感を味わった後、落下が始まり、獣のような声を上げてアスファルトで出来ている駐車場へと落ちて行った。

そして、不意に、人外染みた声が止んだ。近くにいれば、おそらくは聞こえたであろう果実を潰すような音は、遠く離れた識織の耳には届かなかった。

ただ、ゆつくりと向かいの駐車場を見下ろすと、そこには、真っ赤で粘着質の液体が、美人ねーちゃんを中心に不気味な魔法陣のような模様を形作っていた。

識織はその光景を何も言わずに見つめ、彼女が飛び降りてきた部屋の方に視線を向ける。

そこで、なにか紅い瞳を持った何かの存在を感じた。それは、識織に見られていると分かるや否や、一瞬でその気配を霧散させ、気配の海である街の方へと消えて行った。

何が起こっているか、あまり分かっていない識織だったが、ここは社会人になるための試練だと思い、通学鞆の中からスマートフォンを取り出し、警察を呼んだ。

「もしもし？ 警察ですか？ たった今、飛び降り自殺をした女の人がいるんですけど」

第二話：異能

東京都某所。明蘭学園高等部。全国でも有数の名門私立学校で、学力もさることながら、運動も全国トップレベル。さながら文武両道を体現している、超の上に超を超倍したぐらいの超エリートが通う学校、のはずだ。

そこで疑問が湧き立つのだが、そこに超平凡である本多少年はこの学校に通っていい存在なのか？

いいのである。

「おい、本多。本多きゅーん、聞こえてますかー？」

そんな超エリート学校の普通の教室で、自称普通男子、本多識織は自分の机に自前の枕を装備させて昼寝を敢行中。クラスメイトの善意ある挨拶を完璧に無視。

いびきを立てずに礼儀よくご就寝中であるのに対し、クラスメイトAは構わず話しかける。

「今日、新学年新学期早々遅れてやってくるとはどういう御了見でございませうか？」

そうなのだ。あの後、警察から事情聴取やらなんやらを無駄に長い時間かけて聞かれたわけだ。それもそうだろう。通報した最初の

言葉が、『飛び降り自殺』なのだから。

「……おい。ぼこるぞハゲ。さっさと起きねえと、全部剃っちまうぞ」

「うつせえな！！ こつちゃあ朝から事情聴取やらをされてとてつもなく不機嫌なんです！ あの税金泥棒どもが！ 最近の連続自殺事件で目立ってるからって調子こいてんじゃねえぞ！！」

むぎやー！ と叫びながら天井に向かって怒りをぶつける。クラスメイト全員の視線が集まるが、それを気にせず自前の低反発昼寝用枕にきちぎちと噛みつく。

周りのクラスメイト達はその発生源が識織だと知ると、「またお前か」と口々に言っで各々語らいに耽りだす。

「なに？ お前、また面倒事にエンカウントしたのか？」

クラスメイトA（男子）は、未だに荒れている識織を無視して話題だけを抽出する。まるでスポットの如く、それ以外のものはゴミとでも言わんばかりに、識織の心を無視した。所謂、意趣返しである。

「ん、ああ……向かいの美人ねーちゃんが飛び降り自殺したのを目撃しちゃった」

「へえん。大変なんだな、お前も」

「俺は、このことを聞いてそれだけで終わらせるお前は凄いと思うよ」

話が膨らまねーな、ともう一度低反発枕に顔を埋める識織。

それをクラスメイトAは、「人の不幸で話し膨らませて、面白くねーべ？」と至極まっとうな返答をしてくださった。それはそれでメディアの在り方を全面否定しているような気もするが、まあ、そんなものなのだろう。

「そんで？ お前は大丈夫なのかよ、生の死体を見て」

「……ん、そうだな、」

人の死体を見て、人の死に直面して、動揺しなかったのかと。それを見て、お前は『大丈夫』なのかと。平静を保っているように見えるが、本当はそんなこと無いんじゃないのかと。

「死体ぐらい、なんてことはないさ」

今までよく見てきたからな、と。

低反発枕に顎を当てて、黒板の方をぼーっと見つめながら、何の気なしに、当たり前のように、平然とそう言った。

それに対してクラスメイトAも、「そうか」と答えるだけで。

これ以上、この話は膨らませないほうがいいと判断してのことだろうか。もちろん、識織の冗談という可能性も高いし、現実味の無い話しだ。

だからこそ、ではないだろうか。

「まあ、お前が大丈夫って言うんなら、大丈夫なんだろう？」

「まあ、俺が大丈夫って言うんだから、大丈夫なんだよ」

そこで新学年最初のホームルームを告げるチャイムが学校全体に

響き渡り、がやがやと生徒たちが各々の席について行く。クラスメイトAも例外ではなく、「じゃあな」と告げると右端の一番先頭の机に向かった。ちなみに、識織の席は左側の窓際、運動場がよく見える一番後ろの机である。

と、ちょうど一年生からの担任、孰川いすかわるるるが高性能な身体を見せびらかしながら教室に入ってきた。大和撫子然とした長い黒髪を歩きたびに揺らしながら、その艶めかし胸やら何やらをぼわんぼわんと。

それと同時に学級委員が、「起立」と堅苦しい掛け声を。識織も仕方がなく低反発枕から顔を引き剥がす。

「礼」

「おねがいします」

「着席」

とまあ、普通だ。

「おはよう、みんな。二年生になってもこのクラスを持てるなんて嬉しいわ」

とまあ、普通の挨拶をしている孰川を興味なさ気に頬杖を突きながら眺める。相変わらず、男子高校生を挑発しているとか思えないプロポーションをしている。男子からは欲望に塗れた視線が、女子からは憧れと嫉妬の視線が。

そんな普通以上異常未満の担任は、普通の挨拶をしながら、とあることに触れてきた。

「とまあ、ここまでは前置きだったんだけど、本多くーん？ キミ
キミ、いつになったらその面倒事エンカウント率下がるのかなー？」

「せんせー、それは禁句だと思いまーす」

あはははは、と教室から笑い声上がる。識織は、やれやれと言
った様子で運動場に視線を移した。

「本多くん、無視はいけないわよ無視は」

まだからかってくるつもりかこのオバハン、と心の中で悪態をつ
くと、識織はがらっと立ち上がって、「先生」と神妙な声で話し
かけてみた。

静まり返る教室の中、るるるは、「どうぞ、本多くん」と相変わ
らず悪戯っぽく笑うだけだった。

「俺のエンカウント率なんかより、先生の露出度を減らした方がい
いと思います。どこの写真部やらが盗撮しているとも限りませ
んので」

「本多アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ア！」

「あら、そっなの？ 写真部副部長、浦島くん？」

「はっ！？」

ここまで簡単に釣れてくれるとは思わなかったが、どちらにせよ
話題は自分から逸れたようなので、識織は悪魔のような笑みを浮か
べながら低反発枕が待つ机へと顔をダイブさせた。

なにごとくも、頭を使えば大体の危機は回避できるようだ。また一つ、教訓を教えてもらったことに感謝しながら、尊き犠牲になった浦島くんに向けて、合掌。

放課後。健全な高校生の諸氏であれば、八割方は部活動に精を出しているところだろう。しかし、識織は部活もせず、とある一室に呼び出されていた。

その一室とは、漫画や小説染みた、学校の生徒の中で最高権力を保有する、生徒会室。室内はオレンジ色の夕日が差し込んで、中央にある会議机を幻想的に照らしていた。

そこで、生徒会長である女性と対談中。

「識織くんは、自殺ってどういうことだと思う？」

窓から差し込む夕日に焦げ茶色の肩まで伸ばした髪を煌めかせながら、優雅にそんなことを聞いてくる。

「源先輩。その前になんで俺を呼び出したのか聞いていいですか？」

識織のそんな問いに対して、源先輩　源終夢^{みなもゆいむ}は、くだらなさそうにこう答えた。

「先生方から、あなたが最近流行りの自殺の目撃者になったからよ。じゃなかったら、平凡なあなたとなんか話さえないわよ」

少しだけ心に傷がつく識織。相手が女性なうえに美人なわけだから、ダメージは野郎に言われるより次元が違うレベルで痛いのだ。そんな痛みを識織は覚えながら、彼女の問いについて考えようとしたが、アホらしくなってやめた。

「自殺つてのは、自分で自分を殺すから自殺つて言うんじゃないですか？ それ以上でも、それ以下でもないんじゃない？」

「もし」

彼女は、識織の答えに対し、まったく物怖じした様子も無く、こう答える。

「もし、死んだその子たちが、誰かに脅されたり、苛められたり、蔑まれたり、差別されたり、追い詰められたりしていても、かしら？」

自殺とは、自分で自分を殺すことだ。これは変わらない。そこにどんな心境があったとしても、自殺とはそういうことだ。そこに誰か他人の手が加わった状態のことを他殺という。

しかし、終夢が言ったのは、どうなのだろうか？

「それは、」

「社会的には何の制裁も加えられないけど、そうしたことを行った人間というのは、自殺を促したということと同様よね？ それはつまり、他殺、ということにはならないかしら。そうね、間接的他殺、

とでも呼んでおこうかしら」

間接的他殺。直接的他殺とは打って変わって、あまり騒がれない。それは、自殺という大きな隠れ蓑に隠れているからだろう。誰かが自殺者を脅していようが、苛められていようが、蔑まれていようが、差別されていようが、追い詰められていようが、最終的に死ぬのは、自分である。

「つまり、実体の無い殺人というわけよ。そういう、間接的他殺というのはい」

「けど、やっぱり、直接的他殺、殺人の方が、恐ろしくないですか？」

瞬間。彼女の華奢で細い右腕が物理的にぶれるのを感じた。
刹那。両目に突きつけられた人差し指と中指に恐怖を覚えながらも、その右手首をなんとか掴みとった。

「へえ、よく、止めたわね」

「生憎ながら、『眼』がいいんでね」

そう言うと、終夢の右手首をぱつと離れた。すると、そそくさと後ろに下がっていった。驚くことに、その距離三メートルである。通常の人間が初速度ゼロから一気にあそこまで加速するのは不可能だ。

「それ、何かの『異能』？」

「さあて、どうなんでしょうね。……はは、っていうか、センパイ、『異能』ってなんですかー？」

識織がそう言うと、終夢は面白くなさそうに、「ふーん」と息をつくと、意地の悪い笑みを浮かべるのもやめてしまった。

識織は、彼女のどこに琴線が隠れているのか恐れて、この話を膨らませないようにしたかった。

「そうやって線引きしているのもいいんだけどね？ 最近の連続自殺事件、あれ、どう考えても『異能』によるモノでしょう？ 私、そういう陰湿なの嫌いなものよ」

「先輩。後輩イビリは陰湿じゃな」

ヒュバツ！ と彼女の体が消えたかと思うと、次は膝蹴りを放ってきた。まさか、ここまで本格的な攻撃を仕掛けてくるとは思っていなかった識織は、その圧倒的質量による膝蹴りを、為すすべなく額に喰らった。

正直なことを言うと、そのスカートの中にある黒い下着に目を奪われていたのだが。

面白いように後ろに吹っ飛んだ識織を、彼女は、「ふん」と鼻を鳴らすだけだった。

「痛いですよ、先輩」

視界がちかちかしているのを感じながら、無意味だと分かっている反論をせずつ入れなかった識織。

「隠し事は『面白くない』わ、識織くん。知っているなら知っているで、ちゃんと語らせることだってあるのだし」

高校生にしては豊かな胸の前（青系のブレザーを押し上げている）で腕を組みながら、額を押さえる識織を見下してそう言う。

識織は若干揺れる視界にぐらつきながら、よろよろと立ち上がると終夢に視線を向けた。

その焦げ茶色の瞳は、こう語っていた。

『真実を吐け』

識織は少しだけ迷ってから、意を決したように彼女を見つめる。

「『真理の明眼』っていうんですよ。俺の両眼。言えるのは、それだけです」

先程潰されそうになった眼に手をやりながら、自重気味に笑う識織。

それが、彼の異能の名なのだろう。

「ふうん。『異眼』系統ね、珍しいじゃない。能力は？」

「知ってるでしょう？ そういうのは、あんまり教えると自分の命にかかわるんですよ。俺、これでも自分の命は大切だと思っている人間ですから」

異能。それは超能力とも呼ばれる代物である。

もちろん、大々的に公おおやけになっていているわけではないが、知っている者は知っている。知る人ぞ知るを、さらにミステリシリアス化したようなものだろう。

その多くは普通と変わらない生活は、送れない。

精神が、もたないのだ。

だからこそ、こういった一般人である超能力者同士がこうして普

通に顔を突き合わせるのは珍しい。

「へえん。だったら、私のも教えておいてあげるわ。名前だけ、ね」

『波動』。そう呟くと、ふらふらと立ちつくす識織を置いて、どこかに去ってしまった。後ろ姿で手を振って来た。カッコよかったのが癪だったので、振り返さなかった識織。

生徒会長、源終夢。

根城である生徒会室から彼女が去ると、部屋全体に張り詰めていた緊張のようなものがぶつりと切れた。

「なんだよ。あの速さ、素面すまですかい」

そう悪態をつくくと、識織も彼女を見習うようにしてその場を去った。

そして、去り際にこんなことを思った。

人を殺したことがない奴なんて、いるのだろうか？

第二話：異能（後書き）

感想・ご批判・ご指摘、お待ちしております。

第三話：真理の明眼

バイト。一人暮らしである本多少年にとっては奨学金よりも大事な収入源である。

コンビニの店員だが。

そんな生命線であるバイトに五分遅刻してしまった。普段は真面目な組織は、こう言うことに結構うるさい。これでクビにされたらどうしよう、などと本気で悩んでいたのだが、店長が寛容な人間なようで、「大丈夫だよ」の一言でホッと胸を撫で下ろした。

それもこれも、あのバケモノ生徒会長の所為である。

俺の心労に要した精神力を返せ、と口の中で呟いていると、お客に不気味がられたようだ。

学校が終わるのは午後三時三十五分。バイト開始は四時半。そこから九時まで働く。

時給は九百円。お高め。

こんな優良物件おつとめ物件。簡単に諦められるはずがない。

そんなこんなで、今日も本多少年は快適空間コソクンで精をだしている。

バイトが終わり、夜も更け切った初春。適当に先輩や店長に挨拶をして、彼はコンビニを後にした。首には彼女からもらった手編みマフラー。なんかが巻かれているわけも無く、そんな存在も無く、微塵も無く、黒いネックウオーマーが着けられている。

「今日は、金曜だったか。なら、明日は行けるかな？」

コンビニの入口の前で月が浮かぶ空を眺めながら、どことなく嬉しそうに笑う。

そんな彼が向かうのは、自宅、というわけではなく、コンビニ近くの大型量販店、チープマーケット。とにかく、安いことで有名なスーパーマーケットだ。

移動方法は、もっぱらバイクである。学校への通学方法もバイクである。というより、どこに行くのもバイクである。まあ、バイクという名の原付なのだが。

ヘルメットをかぶり、エンジンを付け、いざ出発。

初春の頬を撫でる風はまだまだ寒く、ネックアーマーを装備していなければ頬が真っ赤になっていたであろう。

「さみーな、やっぱり。今日は暖かいモン食いたいな〜」

そう言いながら原チャリを飛ばす。それでも、まあ、法定速度は超えないが。

そうは言っても、ギリギリのところまでは出すので、かなりの速度となっていた。

このままどこかに、何かに追突すれば、自分もあっさりと死ぬる

ほどには、十分な速度に達していたのだった。

死。そのキーワードは、ここまで近くに存在している。

日々、人間は、自分は死なないと思っ生きている。いや、それは非日常であつたとしても、簡単に自分が死ぬというイメージは湧かない。

だから、死なない。

死というイメージを出来ない生物は、死なない。死ねない。

しかし、だ。

死、というイメージをしてしまった生物は、自分の死を想像できてしまった生物は、容易くその身を散らす。

自殺、もそういうことなのだろう。

自分が、自分に殺されるといイメージを、自分でしてしまった瞬間から、もう、『死』へと突き進んでしまう。

そう。

こんな風に、目の前に飛び出してくる少女のように。

「ッ!？」

その少女もまた、向かいの棟の美人の女性ののように、何かから逃げるように車道へと飛び出してきた。

識織は暗がりから突然飛び出してきた少女の金髪を見た瞬間にハンドルを思いつきり左へと切った。車体は大きく横に傾いで、そのままアスファルトの上を大きく滑っていく。

刻一刻とバイクがアスファルトの上を滑り、少女の元へと突き進

んでいく。

仕方がないな。

バイクが彼女にぶつかる瞬間、その薄皮一枚を隔てて、圧倒的硬度の何かにぶつかったかのように、クラッシュ音を上げてびたりと止まった。

「ぐウ！？ くそ、大丈夫か！！」

身体の至るところを擦り切り打撲したのが、よろよろと立ち上がる。夕方を想起させるのだが、気の所為だと思い、左右へ揺れながら金髪の少女の元へ駆けよった。

「た、たす、けて！！」

そう言いながら識織の身体にしがみついてくる金髪の少女。今度は朝のことを想起させてくる。朝、あの美人ねーちゃんが飛び移ることに成功していたなら、きっとこうなっていたのだろう。

「お、落ち着いて。どうしたの、いきなり飛び出してきて」

「や、奴が、奴が来るの！？ 食べ、られちゃうの！！」

何を言っているのか、さっぱりだ。いや、相手はこちらに伝える気が無いのだから分からなくて当然か。彼女はただ錯乱したように喚んでいるだけなのだから。

「食べられるって、何に？」

未だ暴れる彼女の体を大きく揺さぶり、自分の眼を見させる。そうは言っても、今の自分の『眼』は、見ていて楽しいものではないだろうが。

しかし彼女は『眼』のことなどどうでもいいらしく、その『眼』をしつかり見ていた。

「や、奴は、奴は!!」

ひとり、と。

彼女が飛び出してきた暗がりから、何かの音が聞こえた。しかし、それは物理的な音ではない。頭の中にだけしか響かないような、そんな音だ。

いや、音と表現するのも馬鹿らしいのかもしれない。間違っているというべきか。

住んでいる世界が違う。起源すら違う。根本からして違う。

「バケモノなの!!」

ひとり、と。

彼女が飛び出してきた暗がりから、何かが出てきた。しかし、それは物理的なモノではない。見える人にしか、見せる人にしか見えないような、そんなモノだ。

いや、モノと表現するのも馬鹿らしいのかもしれない。間違っているというべきか。

「化け、物？」

黒い体躯の四足獣、といっても良いのだろうか？

狼のようなその骨格は、しかし歴史上の生物としては、その巨大

ただただ詰めてくる。

ただ、三メートルという巨体の所為か、狭い路地に入ると走りにくそうにしている。まあ、それでも最後には、壁を砕いてやってるわけなのだが。

「くっそ！　なんだよアレ！　どんな『異能』なんだ！？」

超能力と呼ばれる『異能』がある。それを識織は知っているし、もう分かつてはいるだろうが、彼も『ソツチ』の『異能』は持っている。

その中に、『^{クリエイト}創造』を称する能力者もいたが、それは『静』だった。その能力者は、効率が悪いと言っていた。

わざわざ『動』の物を創って、そういう『対象物を殺せ』なんていう設定をプログラミングするより、自分で剣を創って殺した方が早いからだ、と。

しかし、それは強がりには違いないことは分かっていた。

ここまで状況に正確に対応してくるとなると、一個人の脳ミソではプログラムしきれない。

(知らない『異能』？　……なら、仕方がないか)

彼の、所有する、世間一般的に言うところの超能力。

それは、『真理の明眼』である。

簡単に言えば、いや、難しく言ったとしても　全てが分かる『眼』という説明以外は、出来ないだろう。

その瞳を『開眼』することによって、見たいと思っただ全ての事象・真理が、見えるし分かる。それがどんなに超越的物理現象であって

も、超常的オカルト現象であっても、万物である必要すらなく、それらの事象が分かり、干渉できる。

空気であっても、壁のように扱えたり、金髪の少女にしか見えなように設定されているモノであったとしても、見える。

彼の『眼』の前では、神すらも等しい存在となる。

『開眼』と同時に、両瞳が、紅く染まった。

血のように、夕焼け空のように、ただただ、紅く、染まる。

右眼により解析を、左眼により干渉を可能とする。

(……………見たこと、ないな)

やはり、生物ではない。機械仕掛け、というわけでもない。

そして　　超能力ですらない。

まったく新しい、見たことのない、世界の真理の一つ。

解析するのにかかるの時間を要するほどの、複雑な情報を有した、概念。

そこにプログラムされている命令は、『対象者を追跡すること』
だけだった。そこには攻撃性は無い。ただ、ストーカーのように、
ストーキングすること。

そして、最深部に　　『解析を行った存在を、殺せ』

「ッ!？」

自分で自分の墓穴を掘った、というべきか。『真理の明眼』で見
るまでも無く、黒い狼の殺気が膨張する。波形状に繰り出される殺

気を視覚化して、避けながら前へと突き進む。

(空中に逃げるのは愚策、か 殺るか)

金髪の少女の手首を握っている方とは逆の腕を、一定の速度で振ると、袖からかなり大きめのナイフが飛び出す。柄の部分は黒く、完全なオーダーメイドと思われる、飾りっ気のないナイフ。

それを見た少女の顔が恐怖でくしゃりと歪むのを見て、「このまま走れ！」と大声で叫んだ。それを聞いたのか聞いていないのか、頷いたのか頷かなかったのか分からないように震えたまま、路地を走り抜けて行った。

ほっとする間もなく、振り向きざまに右手に握ったナイフでコマのように回転して斬りつける。

牙と直接ぶつかり、腕に直接衝撃が駆け抜ける前に、身体を横に滑らせ、ナイフの刃で受け流す。交差するようになったそのから空きの横腹に、銀色の光を鈍く輝かせるナイフを逆手に持ち替え、掻き切らんと振り抜こうとする。

が、黒狼がその攻撃に対し高速で反応し、身体全体を回転させることでナイフの一閃を避けた。それと同時に、回転力を活かした前肢の一撃が、横に薙がれた。

殺意が込められた爪の鋭い一撃を、獣のように身を沈めて避けきる。瞬間、織織の両足の筋肉に、力が籠った。

身体を沈めたまま、ナイフを持った腕だけを夜空に向ける様は、まさに獣。

静から、動までの、ほんの一瞬。

「死ね」

彼の前では、不死にすら、等しく平等に死が与えられる。生きていない存在にも、存在していない存在にも、平等に死をもたらず。

さらに身体を沈みこませ、冷たいアスファルトに吐息がぶつかるのを感じた次の瞬間、識織の身体が霞む。

走り抜ける銀閃。

黒狼は、二度と少年の姿を認識することは無く、全身に幾筋もの線が奔り、白いモヤのようなモノを噴き出し、陽炎のように消え去った。

識織はというと、額に若干汗を滲ませて、黒狼がいた場所の真後ろにいた。

手に持ったナイフを学生服の袖に仕込み直しながら、今回のことについて考える。

今回のこと、というのはもちろん、黒い狼に襲われたこともあるが、自殺者が全国で増加していることも含まれている。

「『異能』が関わってんのかよ……。面白くもない」

そこで、身体のが抜け落ちるのを感じた。戦闘行為自体は、全然消耗していないが、原チャリで身体全体を殴打したのが、今になつて効いてきた。

「あゝあ。体、なまってるな」

そう言いながら、はた、と、ある重大なことに気がついた。

「原チャリ……こけた……。俺、痛い……。原チャリは？」

どうなったの？と。

全身から血の気が引くのが分かる。そして、全力で今自分が走って来た道を駆け抜ける。汗が、どんどん冷めていくのが分かった。

そして

「お、俺の、俺の血と汗と涙と魂の残骸の血晶がアアアツ！！」

もちのろんで、大破はしていなかった。が、ボディの左半分のそこかしこが、へこみ、傷ついていた。

まるで、自分の身体が傷ついたかのように悶え苦しみながら、怨嗟の声を上げる。

「は、はは、俺の、俺の愛車……………ブチ、殺すツ！！」

ここで、『これ以上の犠牲者は出さない！ 覚悟しろ黒幕！』と言わないのは流石というべきか、言わないべきか。

頭の中で修繕費を考え、計算しながら、ため息をついた。原チャリに跨り、「カタキ、とってやるからな」なんてことを言っただけで労わりながら、チープマーケットへと愛車を進めた。

傷だらけの格好のまま、店内へ。一目散にレジの方へと歩いて行

くと、

「とにかく五千円分。量が多いお菓子を用意し」

「いつもの感じですね」

「はい」

結果、そんじょそこらのスーパーとは違う、文字通りチープなマーケット、チープマーケットでは、特大レジ袋五つ分駄菓子が詰め込まれた。その中に、カップラーメンの袋が一つ分。

「ありがとうございます」

一人暮らしの高校生にはイタイ出費だが、何故か識織はつきつきしていた。

もはや、先ほど上げた怨嗟の声など忘れてしまったかのように、スキップでもとりながら自動ドアをくぐる。

そして、原チャリを労うのも忘れて、早々と帰路についた。

第三話・真理の明眼（後書き）

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第四話：ひなどり園

今は、既に朽ち果てて誰も寄り付かなくなってしまった廃病院。外壁は黒い黴^{かび}が覆い、窓硝子は割れてしまい、もうすぐ取り壊しが決まっている廃病院。

残骸。

数年前までは多くの患者が入院し、大病院ならではの忙しさに溢れた病院で、しかしながらそこには鬱屈とした雰囲気はなく、爽やかな病院、というのがコンセプトの病院だった。

だが。一度の医療ミス。死亡者。

一人の看護婦が、一人の患者のカルテを取り間違え、似たような症状にある患者に、別の治療を施したことによる、拒絶反応およびショック死。

よくある、廃病院になるパターンのやつだ。

そのの、よくある廃病院の一室。

ほかの部屋とは明らかに違う、調度され、黴も落とされた場所がある。

そこに、目に包帯をした白髪の少女と、黒い髪の男性。

「……見つけた。『異眼』」

黒い折り紙を、くしゃつと握りしめ、力を込めた。

その音に反応した白髪の少女は、その方に顔を向け、震える声で呟いた。

「どうしたの、お父さん」

「……なんでもないさ」

かつて、神にその身の全てを懸けて祈りを捧げていた男がいた。

それは、結局誰のためかと問われれば。

男は娘のためだと言い、

他人は紛うこと無き自分のためだと、そう言うだろう。

そして今、男は 悪魔に祈っている。

朝といえば、爽やか、というイメージがある人は、かなり充実した人生を送れている人なのだろう。逆に、眠い、だるい、という人が充実していないというわけではないが、一日に希望が持てている人、と言いたいわけなのだが。

「爽やかな朝だ！」

体に絆創膏やら包帯やらを装着している人間がそう言うと、不気味に思うのは決して悪いことではないだろう。

「さてはて、どうするかなー！」

昨日買ったお菓子を心底嬉しそうに眺めていた。

識織は、そのお菓子を自分で食べるつもりなどない。誰か、他人のために駆ったわけである。

これで、数日間は何れも寂しいご飯になるだろうが、彼が目指す目標のためならば、安いものである。

そして、朝ご飯を用意、といっても、トーストを焼くだけだが。ジャムなども用意して、テレビの電源をつけると、どかりとテーブルの前に座りトーストを食べ始めた。

ニユースでは、昨日飛び降り自殺をしたとされる、向かいの美人ねーちゃんのが報道されていた。

『都内に住む、赤影橙季さん、二十五歳が、先日投身自殺を』

あれは、『自殺』なのか？ と識織は思う。

昨夜の黒い狼に襲われていた金髪の少女を思い出す。アレは、超能力の産物ではないが、間違いなく『異能』の産物であった。

だから、それは、生徒会長の言うところの、間接的他人殺、というやつなのではないだろうか？ と、そんな感情が堂々巡りする。

「うっん。分からなくなってきた」

『異能』は超能力と捉えていた識織。しかし、それは改めなければならぬようだった。

「……………魔術、か？」

そう。超能力が創りだす事象は、力の塊といえいいか。もちろ

ん、脳内での事象を発動させるための演算はしなければならぬが、それはほとんど無意識下で行われる簡単なモノである。

しかし、あの黒い狼には、明確な理論が適用されていた。

超常的で超越的な理論。不可思議で未解明な、明確な理論。そう、『術』のようなモノが組まれていた。

1 + 1 のような単純なものから、方程式など複雑なモノまで。

だからこそ、発動させる本人の脳容量は関係なく、複雑な命令を出せていたのか。

それらが分かりそうで分からない状況で、

「やーめた。どうせ見れば分かるんだし、次はもっとちゃんと見ればいいわけだし」

そうやって、雑念を振り払うかの如く、ジャムを塗りつけ、トーストを齧った。

『 都内を中心とする自殺者の人数は、昨年度の二倍に達しており、これは不況によるものとする説や』

ニュースで原稿を読み上げるだけのキャスターをぼんやりと眺めながら、もぐもぐとトーストを咀嚼する。

いつも通り、オレンジジュースで飲みこむと、

「 魔術、か」

そう呟いて、トーストを再度齧った。

都内某所、孤児院。金が無くて、幸せが無くて、金が無くなって、幸せが無くなって生まれるモノがあるといえば、それは、溜め息と不幸と、孤児である。

ひなどり園。都内各所に点在する孤児院の中で、比較的小さな孤児院。

そこに、

「あ！ しきおりにいちゃんだあ！」

「ほんとだ！ おにいちゃん！」

ほんの少しばかりの『異能』を所有している、本多識織が現れた。厚めの黒いパーカーとジーンズ。両手にははち切れんばかりの菓子が入ったレジ袋が握られている。

「うおおー！ なんだこれえ！？」

子供の人数が十人程度のひなどり園であれば、二週間はもつだろう。

識織は、「ちゃんとみんなで分けるんだぞー？」と笑いながらそれを渡すと、騒ぎながら、ひなどり園低年齢層組、二、三人が持つて行った。

それを微笑みながら見つめていると、識織と歳が近そうな、深い

藍色の髪を持った少女が近づいてきた。

「識織さん、いつもいつも、すみません」

「いいんだよ。藍華さん。こつちこそ、いつもいつもやってきては、楽しませて遊ばせてもらってるから」

と、最大級の笑みを向ける。藍華と呼ばれた少女も、それを見て笑いを零した。

「それにしても、やっぱりこれだけの子供の面倒を見るのは大変だろっ?」

「ふふ。お父さんもお母さんも働いてますから。私が頑張れば、子供たちが笑ってくれる。それだけで、私、頑張れるんですよ」

彼女は、十六歳。しかし、高校には通っていない。父親と母親が始めた孤児院をやりくりするために、ここで働いている、というベキか。

だけど、そんなのは全然苦になっていないらしく、毎回同じような質問を投げかけている識織に対して、毎回同じ回答をするのだ。それも、笑いながら。

「じゃあ、識織さんは、なんでここに?」

しかし、彼女から識織に質問をすることは無かった。

識織は、なんとなくまだまだ蒼い空を仰ぎ見る。自分は、孤児ではない。今は、『家庭の事情』で家族とは離縁状態だが。そこに、彼らと同じ苦しみを味わったから共感できる、という理由はない。

「ん〜、この子供って、泣かないよね」

「へ？ え、あ、はい。転んだりしたら泣きますけど、癩癩を起したりはほとんどしないですね」

「本当は、」

ほとんど間を置かずに、

「泣きたいはずなんだよな」

そう、言った。

様々な理由があり、彼らおよび彼女らは親に捨てられた。彼らからしてみれば、自分は何も悪くないというのに。

本当は、本当は泣きたいはずなのに、当たり前散らかしたいはずなのに、今日も彼らは、笑う。

「だから、泣かせてあげたい、のかな？ 嬉し過ぎて、泣けるぐらい」

俺がここに来ることで、少しでもそれに近づくなら、素晴らしくない？ と、少し悪戯っぽい笑みを浮かべる。

彼の習慣は、ここ、ひなどり園に遊びに来ること。決して、藍華を口説きに来ているわけではないのだ。

識織は周囲を見回し、「そりゃそうか」と呟くと、藍華に、

「あの娘は、どこに？」

「えっと……………いつも通り、あの場所に」

そう言つて、藍華が指をさしたのは本館。地域住民とのふれあいの場所。

「仕方がないのは分かっているんですけど」

「……………」

仕方がない。そうなのだろう。

じゃ、ちよつと行ってきますよ、と識織は後ろ手に振りながら、本館・ふれあいの場へと足を向けた。

その後ろ姿を眺めながら、溜め息。

「……………はー。いいなあ、イブちゃん、羨ましいよ」

切なげに笑みを浮かべると、とぼとぼと子供たちの方へと歩いて行った。

「お兄さんがやってきたよー」

がらつ！ と勢いよくガラス張りの戸を開くと、ふれあいの場に入る。

周囲にはファンシーな人形や、お城の張りぼて、手作り感溢れる

着ぐるみなど、学芸会に使うようなものが多く置かれている。

そのファンシーな人形の山の中に、一つだけ生気を帯びた何かがある。それは、白い、純白の髪を持ち、色素の薄い瞳を持った、オンナノコ。

まるで人形のように無機質でありながら、そのなまめかしさは人間のソレで、日の光を浴びたことが無いような白過ぎる指で、分厚い本のページをめくっていた。

「イブちゃん。こんにちは」

「……………」

十二歳ほどの少女イブ 園木齋歩^{さい}。当て字としてイブと読むのだ。

識織は、その少女の前に中腰になると、へらっと笑って、

「お菓子買ってきたんだけど、一緒に食べない？」

「……………いらん」

識織に視線を向けず、一言で切り捨てた齋歩。

そんな少女の姿に苦笑いを漏らしながらも、頭をぼりつと掻き、再度チャレンジ。

「めげないぞ俺は。イブちゃんが話してくれるまで、諦めない」

「さっさと諦めるロリコン」

ペラっと、軽い調子で分厚い本のページをめくると、くあっと欠

伸をした。

若干涙が零れた紅い瞳で無音を見ると、面倒臭そうに口を開いた。

「面倒臭いぞ、キサマ。ボクにかまうなと言っているだろう」

十二歳程度の口ぶりとは思えない、大人びたというより、達観したように語るのだ。

紅い瞳を、伽藍の洞のように見開いて、ただ、じっと識織のことを見つめていた。なにも感じていないかのよう。

だが、識織。識織は動じない。

「やだな、イブちゃん。人と話すのをやめちゃうなんて、それすなわち文化を捨てるってことだよ。人間最大の文化は、対話さ」

「知るか」

「ほら、そうやって切り捨ててばっかりいるから、君の中にはなにも溜まらないんじゃないかい？ 空っぽってうのは、悲しくないか？」

「別に」

「信じるのが、怖いのか？ わかるよ、その気持ちは」

「黙れ」

「だけどね、イブちゃん。そのやり方は、よくない。怖いからって、怖いからって逃げてばかりいるのは駄目なんだよ。たまには逃げるのもいいのかもしれないけど、ちゃんと向き合うことだって、」

「五月蠅い」

「大切なんだよ。きちんと誰かと向き合う。それが人間にとって大事なことなんだ」

「消える」

「君がなにを『視て』しまったのかはわからないけど、それでも、君は戦わなくちゃならないと、俺は思う」

「死ね」

「過去に絶望したのか、未来に絶望したのか、俺にはわからないけど、さ。イブちゃん、君には現在いまがあるじゃないか。現在と向き合っ
つていこうぜ」

「嫌だ」

こんな問答、そんな返答が、およそ一時間続いた。

どちらも譲らず、識織は自分でも笑えるほどの綺麗事を言いまくり、斎歩はなにも感じないままその全ての綺麗事を拒絶した。

第四話・ひなどり園（後書き）

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第五話・ひなどり園(2) (前書き)

……まさか、この小説は、バトルという皮をかぶった、文学小説なのか？

と疑うほどに、考察が多い小説となっております。

第五話：ひなどり園（2）

「識織さん、どうでしたか？」

と、少しだけ心配そうに尋ねてくる藍華。「どうでしたか？」と聞かれれば、識織としては、「そうでした」としか答えようがないのだが、無理矢理答えを創る識織。

「そうですね、喋ってはくれるんですけど 子供らしくないと言えは、そうですね」

あのしゃべり方は、十二歳では絶対に獲得し得ないような喋り方。精神が未成熟な小学生には、演技でも不可能に思われる。最近の小学生は大人びているとは言っても、アレはそれ以上だった。

大人びているというより、達観している。

もう、『視てしまった』かのような、そんな雰囲気。視て、分かっってしまったからこそ、諦めているような。

「まあ、子供が意地はってるって思っていれば、可愛いモンっすよ。逆に微笑ましいというか、なんとというか」

「そうだと、いいんですけど……」

「そうだ、藍華さん。イブちゃんがひなどり園に来た時の様子、教えてくれませんか？何か、分かるかもしれません」

過去と現在は、絶対に繋がっているはずだ。

急に興味を持ち始めたことだって、それは昔、小耳にはさんだりちらつと見たりしたこと、それが何らかのきっかけを受けて、意識の表面に浮きだしてきたのかもしれない。

あの徹底的なまでに無関心は、人間的に見て、過去に何かあったと思わざるを得ない。

藍華は、少しだけ躊躇った様子を見せて、そして口を開き、動き始めた。「あのですね？」と。

「あんまり、子供たちの過去を掘り起こしたくないので、言いたくないんですけど……」

けど、と、

「あの子がまた、表情を見せてくれるなら」

「ありがとう、藍華さん」

定型的に頭を少し下げる識織。

下げた頭を上げながら識織は思った。この藍華の言葉で分かったことは、やはり、昔の齋歩は表情を解放していたということ。そして、やはり、過去なにかしらのことがあったということ。

……まあ、このひなどり園にいる子供たちには、それとない過去があるわけだが。齋歩の場合は、それが特に顕著なのだろう。

「イブちゃんは、比較的年齢が高い時に、このひなどり園に置いて

行かれたんです」

「最近？」

「ええ。そうですね、識織さんがここに通うようになる一年前くらいでしょうか。最初見たときは、いつもニコニコしていて、元気な子供だったんですよ。ここに、置いて行かれる直前まで」

それから、というものだ。

「親は、そんなイブちゃんを化物でも見るような目で見ていたんです」

「アルビノの所為か」

あの白髪紅眼。なにも、ファンタジーな要素があるわけではなく、脱色でもなく、生まれつき。

先天性白皮症。生まれついて細胞のメラニンが欠乏している病気のこと。そのため、紫外線には特に警戒する必要がある、視覚障害や皮膚癌などを起こしやすくなる。アフリカの南東部では、その体には不思議な力が宿るとされ、臓器や体の一部を狙った殺人が後を絶えない。

だから齋歩は、あの薄暗い部屋でただ一人、分厚い本を読んでいる。

「アフリカ南東部では『神の子』とかつて呼ばれているらしいですから。イブちゃんのご両親は熱心なキリスト教徒で、逆に、怖かったんでしょうね。自分たちが信じるその存在そのものが、目の前に現れるってというのが」

信じたものは、不明確であるからこそ、信じられる。実物を見て、後悔しないように。

それは、アイドル信仰と同じようなものか。代表例で言えば、アイドルの排泄物は卵で云々。盲目の盲信だ。

その後、藍華は少し口ごもって 言った。

「離れるのが嫌で、泣き叫ぶイブちゃんに向かって、父親の方が、こう言っただんです。とても、冷たい目で。 『お前に未来なんてないんだ』って」

一瞬。識織の瞳が死んだように虚ろになると、そのまま悪態を吐いた。

「……………クソ野郎」

「……………それから、涙が止まって、声が止まって。……………まるで、のっぺら坊みたいになって、立ちつくしていたと思っただら、一人であの部屋に行っただんです」

親にとって、子供とは何なのか。

神や、仏の教えよりも、軽いものなのか。いるかないかも分からない、不明確な存在よりも軽いというのか。

子供は、所詮は授かったモノとしてしか見ることが出来ないのか。自分たちのチカラで産み育てた子供を、他の力で授かったと形容するのは、おかしくないだろうか。

本来ならば、こうやって悩む必要などないはずなのに。

理由など、考える必要などないはずだった。理由なんてそんなも

のは、ないのだから。

親が子供を護りたいと思う気持ちは、理由なんて御大層なものはないはずなのだから。

識織とて、今は親と仲違いをして、一人、愛知から東京まで上京してきたわけだが、それでも両親は自分のことを心配しているだろう。……少々厳しい所があり過ぎるのだが。

「持っていたものを失う辛さは、測り知れません。多分、そのことで精神的^{トラウマ}外傷を負ったんだと思います」

「……本当、識れたモンじゃないですね」

人とは、残酷だ。

残酷を、酷使し過ぎだ。

本当に、わからない生物だ。

第五話・ひなどり園(2) (後書き)

感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0981z/>

真理と俺。

2011年12月3日23時48分発行